〔クリスマス・メッセージ〕

クリスマスの光

勝地 次郎

クリスマスは光の祭典です。きらびやかなイルミネーションの光に、心を奪われることもあるでしょう。しかし、

「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ」（ヨハネによる福音書8章12節）

と言われた主イエスこそ、クリスマスの主人公であり、あらゆる光に優る「まことの光」なのです。

第二次世界大戦末期の沖縄戦は、極めて悲惨なものだったと伝えられています。戦争で片足を失ったある女性の人生も、本当に気の毒なものでした。愛する子どもは栄養失調で死んでしまい、頼りにしていた夫は、彼女を見捨てて家を出てしまったのです。絶望のあまり、自ら命を絶とうと思っていた彼女の元に、ある日、一通の手紙が届きました。それは、ハワイに住んでいるクリスチャンの従姉妹からのものでした。そこにはこう記されていたのです。

「どんなに辛くても、決して死んではいけません。人生の悲哀のどん底で泣き叫ぶあなたのことが、生ける神の耳に届きました。今、あなたが必要な助け人を紹介しましょう。その方はイエス・キリストです。この方に心身をお任せしなさい。きっと、光と命の道を見いだすことでしょう。」

この手紙を手にした彼女は、聖書を読み始め、ある夜、徹夜で祈りました。神様の膝にとりすがる思いで、彼女の生涯・全存在を託すことを決意し、心から祈りました。その翌日の朝、彼女は不思議な体験をしました。身体が本当に軽くなり、心の底から何とも言えない暖かいものがこみ上げ、神の愛に満たされた実感を得たのです。この体験を経て回心（神の子イエス・キリストを信じ、神中心の生き方に方向転換すること）し、キリスト教の伝道者となった彼女は、人生を振り返って、こう言っています。

「人間は価値がなくなると捨ててしまいます。しかし、神の愛は、取るに足りない者を拾い上げて、造り変えて用いてくださいます。私は魂の安息を与えられました。変わらぬ喜びと愛と平和の心です。」

そうです。イエス・キリストは、信じる者の人生に「変わらぬ喜びと愛と平和」を与えてくださる「まことの光」なのです。

イエス・キリストの生涯を歌った歌に「馬槽*のなかに」（『讃美歌』121番〔日本基督教団出版局〕）があります。

馬槽のなかに
うぶごえあげ、
木工の家に
ひととなりて、
貧しきうれい、
生くるなやみ、
つぶさになめし
この人を見よ。

と歌い始めたこの歌は、

この人を見よ、
この人にぞ、
こよなき愛は
あらわれたる、
この人を見よ、
この人こそ、
人となりたる
活ける神なれ。

と結ばれています。

「この人」―イエス・キリストの「こよなき愛」は、人間の罪の身代わりに架けられた十字架の上で、ご自分を敵視していた人々のために献げた祈りの言葉に秘められています。

「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。」（ルカによる福音書23章34節）

人の愚かな罪を裁くのではなく、ご自身の死によって、信じる者の罪を赦し、永遠の命に導くことこそ、神の独り子イエスの使命でありました。このことを、ヨハネによる福音書ではこう記しています。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。」（ヨハネによる福音書3章16、17節）

家畜小屋に生まれ、馬槽に寝かされた幼子イエスは、十字架に死に、三日目に復活された救い主であったのです。

「起きよ、光を放て。あなたを照らす光は昇り　主の栄光はあなたの上に輝く。見よ、闇は地を覆い　暗黒が国々を包んでいる。しかし、あなたの上には主が輝き出で　主の栄光があなたの上に現れる。」（イザヤ書60章1、2節）

これは、神の言葉を人々に伝える預言者が、主イエスの誕生の何百年も前に、ユダヤ人たちに対して語った言葉です。しかし、これはまた、戦争、殺人、失業、児童虐待などが絶えることのない現代に生きる私たちに対する、希望のメッセージでもあるのです。

天地創造の時、「光あれ」（創世記1章3節）と言われた神は、今も「あなたを照らす光は昇り　主の栄光はあなたの上に輝く」と、私たちに力強く語っておられるのです。

このクリスマスの時、皆様のうちに、「まことの光」なる主イエスによる救いと輝く希望がありますよう、お祈りいたします。

（救世軍士官（伝道者）・司令官）

＊馬槽（家畜のえさの入れ物）

〔インタビュー〕

便利屋は神様からいただいた仕事

右近勝吉さん

今年の九月一日から、北海道旭川市を皮切りに、映画「ふうけもん」が日本全国の市民ホールで巡回上映されています。このモデルとなった元祖便利屋右近勝吉さんに、お話を伺いました。

―まず、映画を観ていない人のために、「ふうけもん」の意味を教えてください。

右近　佐賀弁で、「バカ」とか「怠け者」「はみ出し者」という意味です。イエス様を信じてクリスチャンになるまで、私は本当に「ふうけもん」でした。

―それでは、その辺のことをじっくりとお聞きいたします。

右近　私は満州で生まれ、佐賀で育ったんですが、中学二年の時に兄を頼って東京に出てきました。東京の大学に入るには、高校生になってからこちらに来たんじゃ受験に間に合わない、と兄が言ったもので。

　兄の家の近くに、やくざの組事務所があったんです。その親分の息子と同じ中学で仲が良かったこともあり、私はしょっちゅう事務所に出入りするようになりました。

―中学生の時からですか。

右近　ええ。組員は事務所にたむろして、朝から遊んでるんですね。これはいいな、と思いましたね。それで、高校の時には、いっぱしのやくざになっていました。喧嘩に明け暮れ、歌舞伎町を闊歩して街を仕切っていました。十人くらい子分もいましたしね。アメリカのギャング、アル・カポネのようになりたいと思っていました。高校二年の時など、学校に行ったのはたったの二日だけでした。

―それがどうして、教会に導かれたのでしょう。

右近　街を歩いていた時、宣教師が伝道のため、トラクトを配っていたのに出くわしまして……。その宣教師の笑顔がすごく良くてね。そんな輝くような笑顔、周りにはありませんでしたから。（笑）またあの顔を見たい、とその宣教師の教会に行きました。そして、勧められるまま、渋谷にあるhi-b.a.（高校生聖書伝道協会）という高校生の集まりにも出るようになりました。

―熱心に求道したのですね。

右近　いや、そんなもんじゃないですよ。相変わらず組事務所に出入りしていましたし。楽しいプログラムの時だけ顔を出す、みたいな感じでした。当時、hi-b.a.のスタッフをしていた若い牧師は、ちゃらんぽらんな者を怒鳴ったり、殴ったり、蹴ったりしていました。私なんか何度殴られたことか。でも、とにかく、面倒見が良かった。みんなを家に連れて行き、食べる物があったら食べていいよ、と。牧師というのは、たいがいお金がないじゃないですか。それが食べ盛りの高校生たちが行くものだから、たまったもんじゃないですよ。奥さんは偉かったと思いますね。冷蔵庫はいつも空っぽでした。

―熱血牧師ですね。

右近　はい。その牧師が、渋谷公会堂を借り切ったクリスマスの集会で、宣教師の通訳をしたんです。宣教師は千円札を手に持って、こう言いました。

「これが欲しい人は手を挙げなさい。」

たくさんの高校生が手を挙げました。私ももちろん、挙げましたよ。すると、

「信仰とは、出されたものを受け取ることだ」

と、手を挙げた人は前に出るように、と言われました。二、三十人も出ましたね。牧師は一人ひとりと握手をして、

「あなたは、きょうからクリスチャンです」

と言うんですね。〈へー、そうなのか〉と思いました。

―それで？

右近　すぐ、親分の所に行って、

「イエス様を信じたので、やくざをやめます」

と言いました。指の一本も詰める覚悟でした。けれど、親分はひと言、

「わかった。もう、歌舞伎町には二度と来るな」

と。それで、終わりでした。そんなこと、普通はあり得ないことです。親分もすごいけど、神様が守ってくださったんだ、と思いました。

　その半年後に、教会で洗礼を受け、クリスチャンになりました。二月十七日、寒い日でした。全身水に浸かるのですが、「うきん　かつきち」と名前を呼ばれたので、正しく呼んでもらい、もう一回水に入るはめに。（笑）

―高校のほうは、どうなりましたか。卒業は？

右近　懐の深い先生がいて、そのお蔭で、無事に卒業することができました。私の将来を考えて、切り捨てたりしなかったのですね。今なら、考えられないことです。そして、大学にも進学することができました。本当に感謝しています。

―それでは、いよいよ、便利屋を始めるまでのいきさつを。

右近　大学を卒業して、一年間、ガソリンスタンドに勤めました。兄が、郷里の佐賀でガソリンスタンドを始めるよう、勧めてくれたからです。でも、諸事情でその計画が頓挫してしまいました。それで、次にレーサーになったんです。でも、練習中に仲間が事故で亡くなるということがあり、

自分もいつ命を落とすかもしれない、とレーサーを辞めました。

それから、いろいろな職業を転々とし、ふと気がついたら、二十六歳。この際、少し、世界を見てやろうと、無銭旅行に出かけました。一年くらいの予定でしたが、気がついたら十二年もの月日が経っていました。

―十二年間の無銭旅行……、そんなことが可能ですか。

右近　それができたんです。どの国に行っても、まず、ユースホステルを訪ねます。ユースホステルがない所では、教会に行きます。入り口に立っていると、何が欲しいのか聞かれ、食べ物をもらい、泊まらせてもらえるのです。

また、いつも背中に大きくJapanese Christian（ジャパニーズ クリスチャン）と書いたTシャツを着て、下駄（げた）を履き、カランコロンと歩いていましたから、行く先々で注目され、子どもたちなど、ぞろぞろついて来たりしました。その中の一人と仲良くなって家に泊めてもらったことも度々（たびたび）ありました。移動手段はヒッチハイク。

外国の人たちは、よく握手をしますよね。その時、手にコインを握らせてくれることが結構ありました。それで、無銭旅行から帰って来た時、私には三十万円の財産があったんです。（笑）

―帰国してすぐ、便利屋を始めたのですか。

右近　日本に帰ってきてから、ある会社の面接を受けました。すると、面接官が、

「右近さんは、フーテンだったんですね」

と言ったのです。その時、何の資格ももたない自分に会社勤めは無理だな、と思いました。では何をしようか、と考えていた時、テレビで、「俺たちの旅」というドラマを見たのです。主人公が〈何でもやります〉という仕事をする話でした。これだ、と思いました。〈こういう仕事は面白いな。犯罪、法律や倫理に反すること以外、頼まれたことは何でもやる仕事―これは人にも神様にも喜んでもらえることだ。〉こうして、便利屋稼業（かぎょう）が始まりました。

名刺代わりのチラシ

―依頼はすぐありましたか。

右近　近所にチラシを配ったら、最初の月、百三十件の依頼がありました。これならやっていける、と安心しました。これまで、いろいろな依頼が来ましたが、意外に多かったのが、話し相手になってほしい、一緒に食事をしてほしい、というものです。中には、食事を一緒にしただけで、びっくりするほどのお金をくださる方もいました。いくらお金があっても、寂しさを抱（かか）えている人がたくさんいるのですね。俳優、女優、歌手、文化人、世界の要人からも声がかかりましたよ。某（ぼう）国の元大統領とか、元首相とか……。セキュリティーの関係で名前は出せませんが。（笑）

―すごいですね。その他、どんな依頼がありますか。

右近　海外にいる人に届け物をしたり、人捜しなどもあります。アマゾンにいるらしい、という情報しかない人を捜したり、ニュージーランドのどこかにいる、という人を捜したり……。いずれも、不思議に、それほど日数をかけずに見つけることができました。世界中を旅行して、それぞれの国の様子がだいたいわかっていたので、無駄な動きをしなくて済んだのでしょう。

また、これから自殺をします、と言って訪ねて来た人もいました。じっくり話を聞き、教会に行くよう勧めましたが、後にその人はクリスチャンになりました。

最近では、不登校や引きこもりなどの相談を受けることも多いですね。

―右近さんは「元祖便利屋」と言われていますが、お弟子さんはどのくらいいらっしゃるのですか。

右近　日本全国に一万人くらいかな。海外にも何人かいますよ。ついこの間も、大阪の教会の会員が、四人で便利屋をやりたい、というので、二十日間の講習をしてきたところです。助けを必要としている人、寂しい人、引きこもりの人などに手を差し伸べる人が増えていくことは、うれしいですね。

―便利屋の仕事だけでなく、あちこちでお話もされているということですが。

右近　教会に呼ばれたり、大学に呼ばれたり……。呼ばれれば、日本中、いや、世界中、どこにでも行って自分の体験談を話します。それは、すなわち信仰の体験談なのですが。この間は、大学に呼ばれたんですが、聴衆が会場に入り切れず、結局、外で話しました。来週の日曜日は、教会で話すことになっています。

―メッセージをするということですね。例（たと）えば、どんなふうに話されるのですか。

右近　聖書に、

「お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦（ゆる）してくださったように、互いに赦し合いなさい」（エペソ人への手紙4章32節　新改訳聖書）

というところがあります。親切はだれでもすることができますが、心の優しい人になるのは難（むずか）しいことです。そのためには、人を赦さなくてはなりません。イエス・キリストが自分の身代わりに十字架上で死んでくださり、罪が赦されたことを信じる人だけが、人を赦すことができるのです。皆さん、心の優しい人になりましょう、と話すわけです。もちろん、いろいろな体験談も交えて。

―本当に、右近さんのところに来た依頼は何でも引き受けるのですね。

右近　それが便利屋ですから。（笑）死ぬまでこの仕事を続けていきたいですね。実は、七十歳を過ぎてから心筋梗塞（わぎょう）などを患（わずら）っていますが、今、こうして、健康が支えられています。これは、もう少し働くように、ということかな、と思っています。

映画「ふうけもん」の全国巡回は、来年の一月、東京での上映で終わりますが、次はアメリカのハリウッドで上映されることになっています。私もハリウッドに行く予定です。

この映画で私の役を演じている中村雅俊さんは、私が便利屋を始めるきっかけとなったテレビドラマ「俺たちの旅」で主役をしていました。不思議な巡（めぐ）り会わせです。

―そうですね。最後に、右近さんの好きな聖書の言葉を教えてください。

右近　今は、これですね。

「幸いなことよ。弱っている者に心を配る人は。」（詩篇41篇1節　新改訳聖書）

（キリスト教朝顔教会所属）

「ふうけもん」上映会場で（横浜）

〔信仰の体験談〕

人形を通して知った神様の愛

杉岡 広子

杉岡広子（すぎおか ひろこ）さん プロフィール

宮崎県宮崎市生まれ。宮崎文化服装学院にて洋裁、服飾デザインを学ぶ。銀行員時代、アマチュア劇団に所属し、舞台衣装を担当。カリフォルニア・ルーテル聖書学院で聖書の学びを履修した後、1992年、結婚。2002年、宣教師の夫と共にタイに遣わされ、神学校でアートの授業を指導、シングルマザーのシェルター「恵みの家」で洋裁を教える等、多岐にわたりタイの教会の働きを支える。2009年、帰国。現在、大阪府阪南市在住。夫は近畿福音ルーテル教会牧師。

☆「クリスマス人形展」開催
2014年12月1日（月）～6日（土）　10時～16時
南海ルーテル教会（大阪）
www.nankaichurch.com/

キリスト教との出合い

小学生の頃、アメリカ人の宣教師一家が我が家の近くで宣教を始めました。私の母は、私と兄に英語を習わせようと教会に連れて行きましたが、私たちは毎回、宣教師館をめちゃくちゃにして遊び回っていました。その様子を見た母は、申し訳なく思い、償いに礼拝に出席することを決めました。その後、母は、聖書の学びを始め、数年後に洗礼を受けました。

私は好きな時に教会に行き、頼まれれば教会の手伝いや特別集会の受け付けもする、そんな教会生活を続けていました。牧師や宣教師は、毎年クリスマスやイースターが近づくと、私に洗礼を受けるよう勧めましたが、私はひたすら拒み続けました。当時の私は、洗礼を受けるということは自由を奪われ、花の青春時代を失い、縛られた生活をさせられることだ、と思い込んでいました。

そんな私が、教会に行き始めて約二十年後、ふとしたきっかけで洗礼を受けたのです。自分でも不思議なほどあっさり決心してしまいました。

当時、私は銀行に勤めていましたが、休暇を取り、アメリカ旅行に行きました。その時お世話になった一軒のお宅で、下宿していた三人の神学生と出会いました。滞在中、毎晩、同世代の彼らと聖書の話をしたり、彼らの信仰の体験談を聞いたりしました。そして、洗礼を受けても自分の生活や人格を自分で変える必要はないこと、神様は、今のありのままの私のすべてを受け入れてくださる、ということを知ったのです。こうして安心して洗礼を受ける決心がつきました。

そして、洗礼を受けた翌年、アメリカで聖書の学びをする機会が与えられました。キャンパスでは、髪の色を赤や緑に染めたパンクの青年たちが、あちこちで賛美したり祈り合ったりしていました。その姿を目の当たりにし、形ばかりにこだわっていた自分を見つめ直しました。日本から遠く離れたアメリカでの生活で、神様に守られている安心感から得られる「本当の自由」も実感しました。

アメリカで。友人たちと

年齢も国籍も違う若者たちの寮生活の中では、毎日のように、問題が起こりました。習慣や言葉の違いから起こる事以外に、妬み、喧嘩、恋愛、別れなど、様々でした。しかし、肌の色や髪の色が違っても同じ信仰をもつ私たちは、話し合い、祈り合いながら、解決方法を見つけ出していきました。二年半の学びの中で、私は祈ること、委ねること、賛美すること、感謝すること、また罪についても自然に学びました。

そして、その数年後、同じ学校に通っていた主人と結婚し、牧師の妻になりました。

聖書人形を作り始めたきっかけ

二〇〇一年春、知り合いの牧師から、教会学校で子どもたちに配る聖書の「み言葉カード」の挿し絵を描いてもらえないか、と依頼されました。私は軽く引き受けてしまったのですが、絵を描くことは難しく、どうしてもうまく描くことができません。締切日も近づく中、苦肉の策として、当時趣味で作っていたドールハウスの人形を庭の花壇の前に並べて写真を撮り、その写真を使ってもらうことにしました。

その翌年の二〇〇二年、私が作った「み言葉カード」が一人の牧師の目にとまり、ある教会の機関誌に毎月人形の写真を掲載することになりました。毎月決められた聖書個所の人形を作っていく活動は、通算四年続きました。

「み言葉カード」に使った写真

聖書人形を作る喜び

二〇〇二年八月、私は、タイに宣教師として遣わされることになった夫と二人の子どもと共に、タイのバンコクに移住しました。

私の人形作りはタイでも続いていました。タイでは、日本のようにホームセンターや手芸店が身近に無く、材料探しに苦労しました。しかし、そのお蔭で新しいタイプの粘土や味のある布に出合え、創作の幅が大きく広がりました。

聖書の一つ一つの場面を様々な材料で作りながら、その土地の気候風土、人々の生活や気持ちを考えていると、いつのまにか自分がその場面に引き込まれていき、その度にイエス様の大きな愛を感じ、時間を忘れて夢中で作ってしまいます。そして、一つでき上がるとまた別の場面が作りたくなり、終わりがありません。

聖書人形の可能性―リリア先生との出会い

二〇〇六年春、フィンランド人の宣教師リリア先生から、人形による「受難劇」に協力してくれないかと言われました。私は、人形は飾って楽しむもの、としか思っていなかったので、動かない人形で劇をしようという発想に驚きました。

「受難劇」の一場面。最後の晩餐

日が暮れるのを待って、十畳ほどの小さな部屋でその受難劇は開催されました。一度の入場は十人まで、と制限された部屋の前には、長蛇の列ができました。その時の驚きは今も忘れることができません。真っ暗な部屋に入ると、一場面ずつ照明に照らされていく私の人形たちが、まるで生きているように活き活きと浮かび上がったのです。

その時、私は人形のもつ可能性に初めて気がつきました。

バイブルドールミニストリーの始まり

翌年、私は再び人形による可能性を試してみたくなり、リリア先生に相談しました。そして、受難週の礼拝で「十字架の道行き（15場面）」を披露することになりました。

私が人形と照明を担当し、先生がプログラムの内容を考えてくださり、神学生二人がタイの民族楽器の縦笛をBGMとして、すべての方が人形を見終わるまで吹き続けてくださることになりました。

静粛の中で礼拝がおこなわれた後、静かに「十字架の道行き」を、一列に並んだ観客が歩きながら見ていきました。

その真剣な眼差しを見て、夫と私は、これは宣教のために使える、と確信したのです。

その後、同じ人形の展示会を自分の教会でもやってほしいという依頼が次々に入ってきました。バイブルドールミニストリーの始まりです。

その翌年、「クリスマス物語（13場面）」が完成しました。

バイブルドールミニストリーの趣旨

私たち家族は、二〇〇九年にタイでの七年間の宣教活動を終え、帰国しました。日本に帰っても、バイブルドールミニストリーの活動は続いています。私の人形はアメリカやノルウェーにも行きましたし、日本各地で展示会やワークショップをおこなっています。その中で、「教会に友人を誘いたくても、礼拝や集会にはなかなか来てくれない。でも、人形を観に行こうと言うと気軽に来てくれた」という話をよく耳にします。実際、人形展をきっかけに教会に行き始め、クリスチャンになった方もいらっしゃいます。

この人形展の主役は聖書の「御言葉」です。そして、人形、照明、BGMは、観る人の心に「御言葉」を伝わりやすくするための脇役です。私は、お客様に喜んでもらうために人形を美しく作ろうと思ったことは一度もありません。私が一番大切にしていることは、できるだけ聖書に忠実に作るということです。この人形展の目的は、聖書を身近に感じてもらうこと、そして、今まで一度も聖書に触れたことのない方が聖書に触れるきっかけにしてもらうこと、なのです。

今まで、聖書人形展を通して多くの出会いも与えられました。タイでは仕事を求めてやって来たアフリカやアジアの近隣諸国の人たち。自国から逃れてきたイラクのクリスチャン――世界中には迫害を受けながらも自分の信仰を必死で守っているクリスチャンが数多くいることも初めて実感しました。また、スラムの人たち。刑務所や少年院の人たち。十分な教育を受けられない貧しい農村や山岳地帯の人々。行き場を失ったシングルマザーやエイズを患っている人たち。これら多くの方たちと関わりをもつ機会も与えられました。

聖書人形を通して、神様は私に大きな愛を示し、その愛を伝えていく喜びも教えてくださったのです。

これからも、この人形たちが、世界中の福音の届きにくい地域の人々や、キリストの愛を必要としている方たちのために用いられれば、と願っています。

「クリスマス物語」の一場面。家畜小屋の幼子イエス

●聖書人形に寄せて

「クリスマス物語」では、特にイエスの母マリアを作るのに苦労しました。

これまで見てきた様々な絵画や絵本に登場するマリアは、どれも美しく天使のようです。でも、そのようなマリアを作ろうとすると違和感があり、なかなか満足できません。聖書からイメージされるマリアは、どこにでもいそうな普通の女の子、貧しい家の、よく家の手伝いをする少女です。美しい服もなく、顔も体も埃まみれ。しかし、彼女が誰よりも素直な信仰心と意志の強さをもっていたことは、受胎告知後の彼女の言葉や当時の厳しい戒律の中で妊娠の時期を乗り切ったことから想像できます。神様はどこにでもいそうな普通の少女を選ばれ、本当に大切なことは純粋に神様を信頼する信仰だ、ということを教えてくださっている気がします。

そして、神様は、当時一番身分の低かった羊飼いたちに、最初に救い主の誕生の喜びをお示しになられました。ここにイエス様がこの世に遣わされた大きな意味があると思います。この人形を通して、二〇〇〇年前に暗く冷たい洞窟のような家畜小屋で誕生されたイエス様のこと、喜びだけではなかった本当のクリスマスの物語、そしてイエス様がこの世に来られたことの意味を、もう一度考えるきっかけにしていただければ幸いだと思っています。